日本キャリア教育学会ニューズレター
2022 年度・秋号　(2022.10.31 発行)

発行：日本キャリア教育学会　情報委員会
http://jssce.wdc-jp.com/

※ニューズレターは基本的に春夏秋冬の年 4 回配信しています。
※2022 年度の特集テーマを「キャリアの起承転結」と設定しました。
※ニューズレターのバックナンバーは下記 URL から読めます。
http://jssce.wdc-jp.com/committee/information_comm/

＋・・＋

目次

【特集】　キャリアの起承転結
転職　～働き方・生き方を変える～

＜起業経験者＞
田川貴雄（志布志市移住・交流支援センター「Esplanade」）
竹内清文（NPO 法人レインボーハート okinawa　理事長）
田邊衣美（有限会社アンジュ・デュ・ヴァン　代表取締役）
＜転職経験者：異業界・業種への転職＞
唐澤圭（株式会社メルカリ）
黄莉香（都内認可保育園　保育士）
鈴木加奈子（日本語教師）
＜転職経験者：同業界・業種への転職＞
寺西隆行（ライフイズテック株式会社　官民共創プロモーター）
＜転職支援者＞
長谷川由加子（転職アドバイザー）
川合智之（たのしい働き方・学び方研究所　代表）

【書　評】
『教師の社会学ーフランスにみる教職の現在とジェンダー』　高丸理香（お茶の水女子大学）

【お知らせ】
日本キャリア教育学会 第44回研究大会

■

【特集】　キャリアの起承転結
転職　～働き方・生き方を変える～

なりたい私になりたくて

田川貴雄
志布志市移住・交流支援センター「Esplanade」

子供の頃、クラスで活き活きと振る舞う人気者を見ながら自分はいつかこんな風になれるのだろうかと帰り道で自問した。歳を重ね、子供の頃に思い描いたような生き方ができているのだろうかと幾度となく考えては胸を張れずにいた。何かが足りないと気付いたのは、「誰かに必要とされて生きていない」と感じたとき。

在りたい姿を求め、海外に飛び出し、いくつかの書を読み終えたときに導かれるように鹿児島にやってきた。そこは県内でも果ての田舎で、しかし「志」という文字が２つも入った希望を予感させる地だった―。

働くというとき、皆さんはどのようなことを考えるでしょうか。

憧れの職業や好きなことを仕事にする、給料や福利厚生など条件が良いお仕事を選ぶ、あるいは生きていくためにとにかく仕事に就く、など。いずれも私にとって少しずつ大事な要素ですが、それらに加えて「一生をかけて奉仕できるライフワーク」という重要な概念があります。仕事をする仲間と満足を分かち合えることや、共に幸せになっていけたら良いなぁという想いがあり、そうしたことを手っ取り早く実現できるのは「自営業」に他ならないと考えて今に至ります。

大学の頃は明確なビジョンも持たないまま就職活動を迎えました。自分がこの先何をしたいのか思い浮かばず、勝ち組と言われるスタイルに影響されては軸がぶれるような有様でした。全国に支店のある商社に就職することができ、それなりのやりがいや収入を得たにも関わらず、これで良か

ったのだろうかと何度も考えたのです。しかし仕事を辞めてしまえば二度と安定のレールには戻れないという怖さに怯え、時間が経ち環境が変われば解決するのかなぁなんて他力本願な考えでいました。とりあえず社会人でいることで世間体を保つだとか親兄弟を心配させないためとか…、一度しかない大事な人生のはずなのにどこか他人事のように生きていた時期でした。一方で、この仕事こそが天職なのだと言わんばかりに輝く人を見るたびに自分を不甲斐なく感じた日々を過ごしていました。

転機はリーマン・ショックが起こり、世界中が恐慌に見舞われた時です。身近な人が職を失い、社員だった私もボーナスはおろか基本給もカットされるという深刻な事態で先を案じる状況でした。それにも関わらず、いよいよ何かを変えられるかもしれないという不思議な胸の高鳴りを感じたことを覚えています。きっと初めて真剣に生き方に向き合えた瞬間だったのでしょう。そこで選んだ道は「海外ワーキングホリデー」です。実はそれまで外国旅行すら行ったことが無かったのですが、いつか役に立つかもしれないと自学していた英語を自分のスキルにしたいと思い一念発起して出発しました。周囲には心配をかけましたが、何かを掴まなければこの先の道は無いと強い想いを持って飛び立ちました。

そこで得たものは―、およそ日本に何年いても得られないような経験の数々で、それまで持っていた常識や固定観念が壊され、今振り返ってもドラマのような日々でした。温暖な気候とアクティブなイメージで選んだオーストラリアという国でしたが、多様な人種がそれぞれの文化や風習を持って暮らしているということもまた、私の視野を大きく広げてくれたと思っています。

挑戦しては失敗を繰り返す悔しさでさえも、内なる自分を知る発見でした。何せ最初は幼稚園ぐらいの言語レベルから始まり、生活ルールも事あるごとに違うので戸惑うことばかりです。それが英語の履歴書を書いて職を見つけたり、国際免許を取得してレンタカーを運転したりと次第に目に見えて出来ることが増えてきます。そうした成功体験を積み重ね、「失敗することはけして怖いことではない」という自信に繋がったのです。

帰国後は、私と同じようにオーストラリアにワーキングホリデーに行っていた社長のいる小さなベンチャー企業に就職しました。貿易やインバウンドの事業にも携わり、ここでもグローバルな視点で様々な人の思考や価値観に触れることができました。

そして新しい提案が次々と生み出される社風の中で仕事に対しての価値

観がだんだんと具現化してきました。社長自身が次なる創業者を育てたいということを幾度となく話しており、私をはじめ当時の仲間たちも次々と独立したり、スキルアップのための転職をしていきました。いつかこういうビジネスをやりたいねと、忙しい中にも夢を語り合えた戦友たちとは今でも連絡を取り合っています。

私の存在が必要とされる場所で、持てる力を目いっぱい使って貢献したい―。そのような考えに至った時に見つけた地域おこし協力隊の制度は、魅力そのものでした。どんな所で、どんな人がいるのか分からない不安はありつつも、自分の力でどこまで挑戦できるのかという希望が上回りました。募集の地域を調べていくと、鹿児島県の志布志市という小さな町が「日本一チャレンジ」というユニークな取り組みをしていて、動画などの情報発信もひと際目立っていました。「志」というパワーワードが２つも入っていることも併せて「この場所で何かが始まるかもしれない」と感じて応募しました。

人口減少を課題とする志布志市の移住定住を推進するというミッションに就いて、観光という視点で間口を広げるために民泊をオープンしたり地域住民も市外の方も利用出来る移住交流センターを作ったり、それまでのキャリアと経験を活かすことができました。地域おこし協力隊の任期を終えた後も起業をして志布志市に定住し、今なおやりたいことを追い続けています。

地元出身の伴侶も出来、移住して６年目の私はすっかり「現地の人」になりつつあります。複数の事業を抱えて目まぐるしい毎日ですが、それでも日々新たな刺激を受けてはまた走り出します。関わる人たちと喜びを共にし、豊かな生活を目指していくという私の望む仕事のカタチを作り続けることにも充実感を覚えています。少年の頃にそうありたいと思い描いていたような「私」に近づいていっているのかもしれません。

回り道をしながら、私自身の生き方も変わってきたように感じます。環境の変化や時代の流れなど、人生の転機は皆さんの近くにあるのかもしれません。

＜参考リンク＞
・志布志市移住・交流支援センター「Esplanade」
https://will424.com/?fbclid=IwAR2HltDss1FsayFj_eb-1tFGR_34NiX4uNHdeCt6YZ7lR5Ria0KIjDAoS2g

2 度の挫折からから学んだ適材適所とチームワーク

竹内清文
NPO 法人レインボーハート okinawa　理事長

私は現在 45 歳、LGBT 当事者として NPO 法人理事長を務め、沖縄県を中心に小・中・高・特別支援学校で講演活動を行っています。2022 年 10 月で講演活動は 7 年目に入りますが、お陰様で全国延べ 350 以上の学校で講演をし、初任者研修や中堅教諭等資質向上研修等教職員研修でも多くの講師や沖縄県性の多様性検討委員、琉球新報社「読者と新聞委員会」委員等の仕事をしています。他にもガラクタ整理師として PHP 研究所から著書 3 冊出版、東京 2020 オリンピック聖火リレーランナー、TOEIC935 点等といった経験や資格もあります。

こうした自己紹介をすると華々しく聞こえるかもしれませんが、私のキャリアは順風満帆とは真逆で、30 歳頃の突然の体調不良、30 代後半の借金生活等と色々な挫折を経験しています。いわば失敗の連続でした。

北海道大学大学院修了後、JICA 国際協力機構に就職した私は、東京本部、沖縄国際センターと勤務し、充実した日々を過ごしていましたが、30 歳の頃突然の体調不良により救急車で搬送されました。精密検査を受けても身体的な異常は見当たらなかったのですが、精神的には追い込まれ、2 週間も仕事が出来ない状況になってしまいました。職場の皆さんにもご迷惑をおかけし、人生で初めての大きな挫折を味わいました。

友人の勧めでカウンセリングを受けるようになったのですが、そこで学んだことは自分を大切にすることでした。もちろん仕事をする上で自分の本音ばかり大切には出来ませんが、当時の私は周りの期待や評価ばかり気にして、精神的に相当ストレスがたまり、体が悲鳴を上げていたのだろうと思います。自分は大きな組織で働き続けていると同じストレスでまた失敗を繰り返すかもしれないと思うようになりました。

この体調不良がきっかけとなり、私は JICA を退職しました。実は転職

先は全く決まっていない白紙状態で、あまり皆さんにはお勧めの出来ない退職の仕方でした。ただ、同じころガラクタ整理の世界的ベストセラー作家のセミナーを受講し、自分自身の不要な持ち物を徹底的に手放したことをきっかけに、ガラクタ整理講演を開始したのですが、幸運なことに PHP 担当者の方が講演を聞いて下さり、本を出版させていただくことになったのでした。ありがたいことに 1 冊目が順調な売れ行きで、その後 2 冊目、3 冊目と毎年本を執筆させていただきました。

ガラクタ整理師として活動も広がってきた 30 代半ば、私は一度仕事を休み、オーストラリアで約 1 年間自己研鑽に励みました。オーストラリアでは出会いがあり、アメリカ人パートナーと彼の母国アメリカへ移住しました。私たちは将来同性婚を考えるほどだったのですが、ある日パートナーが遭遇した事故がきっかけで二人の関係も終わり、私は日本に帰国せざるを得なくなったのでした。

そのとき私はパートナーを失っただけでなく、多額の借金も抱えることになりました。実はアメリカでは新しいオンラインビジネスを立ち上げようと、セミナーやコーチングを受けていました。講演会のように毎回労働をしなくても、オンラインを活用してお金が稼ぐことができるという甘い言葉に、先行投資を行ったりしていました。しかしそのビジネスは全くうまくいかず、さらにパートナーも失い、私には借金だけが残るという結果となったのです。精神的にも経済的にも厳しい日々でした。

お陰様で借金は全額返済できたのですが、こうした失敗を繰り返してようやく私は自分のビジネスセンスの低さを受け入れることができました。以前は自分で考えようとしていたことを他の人にいい意味で頼るようになり、自分が苦手なことは教えていただくように、本当に遅ればせながらではありますが、なれたのでした。

こうした変化があった 30 代後半、沖縄のある高校の養護教諭の先生から LGBT 当事者として学校講演会にお招きいただくことがあり、いくつかの学校で講演をさせていただきました。すると、その講演が口コミでどんどん広がり、昨年 2 月には NPO 法人設立にまで至りました。今では講師として相手に分かりやすくメッセージを伝えることが出来る自分の長所に集中出来ています。そして、法人の経営やビジネスの面は、私には力量がないので、いつも周りの方に助言を仰ぎ、助けていただいています。

私が挫折を通じて学んだことは「適材適所」と「チームワーク」の大切さでした。何でも完璧に出来る人はいなくて、それぞれ資質や能力は異なっています。自分が出来ることに集中し、出来ないことは助けていただきながらチームとして仕事を進める時、個人では絶対に出来ない素晴らしい仕事が出来るのではないでしょうか。

現在は、学校での性の多様性の取り組みがさらに定着するよう、現場の先生たちと子どもたちの発達段階に合わせた授業作りにも励んでいます。出来ることに集中し、出来ないことは助けていただく。適材適所とチームワークでこれからも仕事を頑張っていきたいと思っています。

＜参考リンク＞
・NPO 法人レインボーハート okinawa
https://rainbowheartokinawa.com/
・PHP 研究所「竹内清文」関連書籍
https://www.php.co.jp/books/related_book_list.php?author=%E7%AB%B9%E5%86%85%E6%B8%85%E6%96%87&fbclid=IwAR13IgDSD276IQoYgd_dDnMqQF6bmhT9OwNeYvOjilc_QbX_LixXhZL9wCo

---

キャリアデザインのすすめ
～人生のステージで調整可能な働き方～

田邊衣美
有限会社アンジュ・デュ・ヴァン　代表取締役

フランスの小規模優良ワイナリーを開拓・ブランディングし日本市場へ紹介する「クルティエ」という仕事を 20 年以上続けております。法人創業してこの秋 19 年目となりました。

大量生産とはちがい、有機栽培や畑ごとの差異特徴を反映した独自性の強いワインをつくっているため、輸出先でも十分な説明と理解あるパートナーシップが必要なのですが、ほとんどの造り手は家族経営で海外営業担当を設けていません。彼らに代わり数量や価格調整、独占権交渉などを一

手に担い、日本およびアジアのインポーターさんと共に市場で根付くためのあらゆる情報提供を行うのがクルティエの仕事です。この仕事に出会えて私の人生は本当に幸せなものとなりました。

さて、ワインに関する仕事というとほとんどの方がソムリエかワイン・インポーターを連想すると思います。しかし、現実的にはワインに関する仕事は非常に多様で、ワインに使う樽専門の業者もあれば、高級ワインの真贋を見極める査定人、醸造専門学校の教師、前述のワイナリーの代理人クルティエなど、一般の方がご存じない仕事も数多く存在します。

加えて、ワインを通じてワイン業界にかぎらず多種多様な職業の方々と出会う機会に恵まれてまいりました。日仏間を頻繁に往来していると、海外の様々な働き方や教育システムの違いに色々と考えさせられます。

今回は「転職」というテーマと同時に、人生のステージにあわせてキャリアをデザインするという考え方についてお話したいと思います。

まず、かくゆう私も転職経験者であり、パラレルキャリアの持ち主です。

大学卒業後 1 年間、公立中学校で英語教諭として働いておりました。3 年生の担当で受験業務、AET 外国人ネイティブ英語教師の世話係、運動部顧問で土日も練習試合引率や朝練で毎朝 4 時半起床の多忙ぶりでした。もともと身内に教師が多く、子供のころからあまり教師を神聖視せず、私生活がないこともよく知っていましたのでそれほどショックを受けたわけでもありませんが、仕事の責任が大きくなる前にやはりもう少し勉強したいと思い、一年で退職してフランスの大学へ編入したのです。

留学中にもともと好きだったワインに接する機会が増え、喜びにあふれたブドウ収穫を体験し、人生を変えるワインを飲んでしまったことで、ワインを仕事にすることを決心した次第です。大学に籍をおきながらワイン学校に通い、パリのミシュラン星付きレストランでソムリエールとして働く事に成功しました。もう 20 年以上前のことです。その後日本のワイン・インポーターにヘッドハンティングされ帰国、会社員を経験したあと独立し現在に至ります。

この間私は躊躇なく退職⇒留学⇒転職（3 社）⇒独立起業を決断してきました。当時はバブル崩壊後で氷河期。公務員をやめることを残念がられましたが語学が複数できればある程度は食べていけるだろうと考え、誰にも相談せず、他人のアドバイスもききませんでした。バブル期の先輩方のアドバイスは現実的ではないと判断したことが、結局吉とでたわけです。

ここで私が感じている日本の課題点をお話したいと思います。
もうすでに明白なとおり、日本特有の終身雇用制度はほぼ機能しておらず定年時のまとまった退職金や、安定した年金生活などはほとんどの国民が享受できない時代となりました。
ですが未成年や若者へアドバイスをする際に、多くの成人が自分の過去の経験からやや非現実的な話をしてしまいがちです。いまだに大企業や公務員が安泰、そのために一流大学という考え方を信じる中高年が多い事には驚きを隠せません。
もちろん、大企業の繁栄は続きますし、官僚は一流大学出身者が多いという事実は変わりません。ですが不況時にはリストラで簡単に人員整理が行われる時代にトップポジションのまま生涯を終える人はごくわずかなのです。
大多数の人々は転職や休職、パラレルキャリアや副業を経験することが当たり前の時代となっているのに対して、今の日本は自分の年齢や状況、ステージにあわせてキャリアを変えるという考え方が欠落しています。
大学受験と新卒採用のワンチャンスがすべてではなく、男女問わず、結婚・出産・子育て、介護、充電期間、病気療養、キャリアアップの勉強、留学など人生のあらゆる節目でキャリアを調整できることこそが現在の日本でより求められているのではないでしょうか。
そしてこのような考えをもち、実際に転職についてアドバイスができる人、広い分野の職業をよく知る人、現実的に毎月少しずつ稼げる副業の構築の仕方を指導できる人・機関が本当に少ないことが我が国の弱点だと感じています。

私はワイン事業の他にも社内新規起業でネット物販や合法民泊、ウェビナー講師、イベント開催など複数のスモールビジネスを立ち上げてきました。ここ数年は海外出張がほとんどなかったため、まとまった時間を活用して自身の経験とノウハウをベースに「ミニ起業セミナー」を開催しています。
これは「スモールビジネスは誰でも構築できる」をテーマに自分が好きな事・得意な事をマネタイズする実際的な方法を指導する内容です。私が創業したころと違い、今は安全なプラットフォームを使えば、個人でも低コスト低リスクで簡単にスモールビジネスを構築できるようになりました。創業は難しくとも、スモールビジネス・副業は本当に敷居が低くなってきているのです。
人生のさまざまなステージにいる方々が自分の「好き」をマネタイズす

べく、業種の多様性、働き方の多様性、そして個人でも海外と取引ができる時代になった利点を知ることは本当に大切だと実感しています。

貴会が活動を展開しておられるとおり、未成年、若者、中高年、退職者、年齢関係なく私たちはもっと自由に多様なキャリア形成が可能であるという事実が、もっと世に浸透することを願ってやみません。ますます変化が加速するこの時代に、微力ながら私も活動を続けて参りたいと思います。

＜参考リンク＞

・電子書籍『ワインビジネスへの扉: ワイナリーの代理人・クルティエ』
https://www.amazon.co.jp/dp/B08VNYB63L

・YouTube「ザ・ワイン～大人の嗜み」
https://www.youtube.com/channel/UC84rTXlLEgswflY0aeJNVbg

・Udemy 講座「ミニ起業セミナー」
https://www.udemy.com/course/amysmallbusiness001202208/?referralCode=14F906F5FABEDCAFB8BC

---

40 歳・2 人の子持ちで初転職
～オリジナルキャリアの時代～

唐澤圭
株式会社メルカリ
認定特定 NPO 法人 JSBN　理事

40 歳、2 人の子持ちで初の転職。

しかも、100 年の歴史を持つ総合商社から、創立 10 年にもならないテックカンパニーへ。

こう聴くと、「なんてチャレンジングなんだ！」と思う人もいるかもしれませんが、私の場合、キャリアとプライベートと色んなことを積み重ねていく中でこのタイミングでガラリと違う環境に飛び込んでいくことはとても自然なことでした。

人生 100 年、100 人 100 通りのキャリアの時代に、一つのサンプルとしてこういうキャリアもあるのだということで少しでも参考になればと思い、

18 年間のキャリアの振り返りと、転職後半年経っての思いを書いてみようと思います。

◆「人事」を軸に

私は新卒で総合商社に総合職として入社し、人事を希望して人事に配属されました。以来、労務、部門人事、人材開発、グローバル人事・・・と一環して 18 年間人事関係の業務に就いた後、今年の 4 月に株式会社メルカリに転職しました。

総合商社に入社した新卒の人達は、第一線で世界を飛び回る営業を志望する人の方が多いので、人事を志望すること自体を珍しがられるのですが、私の場合はシンプルに「人」が好きだから、という理由に加え、「総合商社だからこそ」コーポレート部門の方が幅広い事業領域のビジネスに関われること、多様な国籍・バックグラウンドの人達と協業できること、「商社は人が財産」と言われている中で人を扱う人事という仕事に興味を持ったことから人事を志望しました。

内定者面談時はまだ大学生でそこまで深く考えていたわけでもなく、「一旦人事に入ってみて、色んなビジネスを見て面白そうなところがあったら異動希望出そう」くらいの感覚だったのですが、配属されてみると、人事の仕事と一口で言っても採用から育成、労務や企画にグローバル人事…と、幅広くて奥深く、人事を深めていきたいという思いが強くなりました。

◆経営と「人」のわかる人事を目指して

人事を深めたいということで、20 代のうちは社会保険労務士の試験に取り組み、何度かの失敗を経て何とか合格をしました。しかし「人事の専門性を高めるのも良いけど、しっかりと経営のわかる人事になりたい」という思いが強くなったのと、諸々のタイミングがあり海外研修生として駐在する機会を逸してしまったことから、国内にいながら英語で MBA を取ることができるグロービス経営大学院に入学しました。一人で悶々と勉強をしていた社労士よりも、学友と喧々諤々議論しながら学ぶ MBA の方が私の性格には合っているな、と感じました。

MBA 通学中に出産、半年の育休を経て復職後、また学習意欲がうずうず湧いてきた時に選んだのはコーチングです。以前から、外資系の HR や研修講師の方でプロコーチ有資格者の方が多かったので、これからの時代の人事スキルとして有効かと思って始めたのですが、これが自分の性格と思いにドンピシャにはまり、今後、更に深めていきたいと思っており、最近

は関係性と組織のコーチングである「システムコーチング」でもプロ資格を取ったところです。

また、「誰もが自分らしくイキイキと輝ける社会を創る」という Life Purpose に沿って、キャリア教育系の NPO 法人での活動も 5 年ほど前から始めました。

◆全く違う環境へのチャレンジ

さて、前職は総合商社ということでビジネスも世界中で展開しており、人にも恵まれて大変良い環境で楽しく仕事させて頂いていましたが、やはり人生 100 年時代、定年まで一社で勤めあげるというイメージが湧かなかったのと、自分の性格的にもより沢山の多様な人とともに働きたい！という思いが強かったので、転職を決意するのは全くハードルではありませんでした。

ただ、女性の人生の中で出産のタイミングは少し考慮した方が良い要素であり、私の場合は第二子を産んでから転職活動を始めました。(友人の中には転職後妊活をした人もいれば、育休中に転職した人もいますので、これもまた人と状況次第でそれぞれだとは思います。)

当初は日系の大企業と全く別の環境、ということで、外資系の人事のポジションばかりを探していましたが、とあるタイミングでエージェントの方からメルカリを紹介された時に、ピン！と来ました。

メルカリは外資系ではないですが、職場環境という意味ではエンジニアを中心に Non-Japanese の方も多く、HR の部署も GE や P&G、J&J など外資系出身の方が沢山います。新卒生え抜きが 9 割近い前職の環境で、もっと多様な視点で多様な意見を戦わせながら刺激し合いたい、と思っていた私にとって、メルカリは理想的な環境ではないかと思い、ご縁を頂いて入社することにしました。

◆転職後、半年経って

今はちょうど転職して半年経ったタイミングですが、振り返ってみて、自分の決断は間違っていなかったな、と感じています。

転職の時に重視していた、多様なバックグラウンドの優秀な仲間達とともに働ける環境はとても刺激的ですし、100 年の歴史を持つ大企業とは全く違う環境に良い意味でカルチャーショックを受けながら、毎日楽しく働いています。

メルカリは社内のコミュニケーションは全て Slack でみんながあだ名で呼び合いますし、twitter や note などの SNS での発信も盛んです。日本国

内どこからいつでも働いて良い制度なので旅しながら働いている人もいたり、副業推奨なので自分の会社を持っている方や専門性を発揮して社外でも貢献されている方など、本当に多様な方が働いています。

Value の一つに「Go Bold」を掲げていますが、人事制度も様々なことに Go Bold に取り組んでおり、HR 分野では日本企業の中でかなり最先端を行っていると自負できますし、そこで働けることはシンプルにワクワクと楽しい経験です。

◆今後の展望

最近 NPO の活動で高校生や保護者の方に講演する際も話しているのですが、キャリアに対する考え方も仕組みも激動の時代であり、誰かをロールモデルにするというよりも、一人ひとりが自分のオリジナルのキャリアを築いていく時代だと思っています。

私の場合はプロコーチの資格を有していることと、キャリア教育 NPO の活動もしており、今後はメルカリの仕事と副業をバランスよくやりながら、私オリジナルのキャリアを築いていければと思っています。

夫の故郷である屋久島でゲストハウス運営をしたり、そこでコーチングセッションを提供したいという夢もあり、それも副業推奨・かつ日本全国どこからでも働けるメルカリでなら、両立も実現可能かと思っています。これからもまた新しい出会いや刺激で新しい目標ができ、どんどん変わっていくのでしょうが、その変化を受け入れ楽しみながら進んでいきたいと思います。

最後に転職に関する思いを書いた note 記事のリンクを貼りますので、ご興味持って頂いた方はご笑覧ください。

＜参考リンク＞

・note「18 年間働いた総合商社から 2 人の子持ちで転職をしてみたワーママの“願い”」

https://note.com/keikarasawa/n/n952298a04e2c

自分らしい働き方を求めて

黄莉香

都内認可保育園　保育士

「すごく驚いたけど、とても向いてるチャレンジだと思う！」

外資系生命保険会社を経て 20 年勤めた出版社を退職し、保育士へ。キャリアチェンジの報告をすると、友人達が口を揃えて言ってくれる言葉です。

◆決意の背景

人生 100 年時代。折り返し地点に近づき、キャリアを見つめ直すタイミングだなと感じていました。

コロナ禍で在宅ワークが可能になってきたとはいえ、妊娠、出産、親の介護や看取りを経験する中で、バリバリと仕事をメインにした働き方についても違和感がありました。

子育てや地域とのつながりを大切に、もう少し緩やかに、かつ、複業・脱週 5 勤務の働き方にも挑戦してみたい。

前職の金融やマスコミは多くの人が憧れる仕事。世間の評判優先で志望したところがありました。

対して保育士は、社会を支えるエッセンシャルワークであるにも関わらず社会的地位も給与も低く、敬遠されがちです。それでも、出版社でジェンダー平等や SDGs に関する企画を多く立案する中で、もっとリアルに働くママやパパを応援したい、次代を担う子ども達を育てたい、保育士自身の処遇改善についても現場から声を上げたいと、自ら飛び込んでみたい気持ちが日増しに募っていきました。

息子を出産後、毎晩絵本の読み聞かせをせがまれたり、日々の可愛らしいつぶやきに癒されたり。子育てを想定していた以上に楽しく感じていることも、子どもと関わりたい気持ちを後押ししました。

さらに、文部科学省では 2025 年 3 月末までに保育士として 3 年の実務経験があれば、幼稚園教諭資格が取得しやすい特例制度があり、認定子ども園で保育教諭として働く道も開けることを知りました。逆算すると 2022 年 4 月がリミットでしたので、飛び込むなら今だと直感しました。

◆資質、能力について

自分の希望のキャリアを実現するために、或いは、自分のキャリアを幸せなものとするために、自分の資質、能力の把握や言語化が大いに役立っています。

転職に際し、ストレングスファインダーで確認したところ、わたしの上位5つの資質は以下でした。

1. Empathy 共感性
2. Learner　学習欲
3. Maximizer 最上志向
4. Ideation　着想
5. Intellection　内省

そこで、履歴書や面接では、これらの強みを織り混ぜ、保険会社、出版社、いずれの職場でも、相手の話を丁寧に聴き、思いを汲み取り、前向きな提案で希望や願いを叶えてきたことを伝えました。また、このスキルを保護者や子どもたちとの関わりの中でも生かしていきたいとアピールし、スムーズに内定を頂けたように思います。

実際に働いてみると、園の中でも自分の気持ちを上手に伝えられない子のフォローや、子育てに悩む保護者への対応など、とりわけ共感性を発揮している時に働く喜びを感じています。

自分の得意な資質、能力を活かして働くと、周囲からも評価されやすく、働きがいに繋がることを強調しておきたいと思います。

◆外国人としてのバックグラウンド

小学校入学前、父から、我が家は外国籍のため、教育を受けさせる義務がないが小学校に行きたいか？と意思確認がありました。

入学後は、名前が珍しいとからかわれたり、漢字テストで満点を取っても中国人だからと自分の能力として評価されないことがありました。学級委員などは遠慮しておくよう両親から言われていました。

このように、日本生まれでありながら、周囲とは違った意識を持たざるを得ず、生きづらさを感じてきましたが、中国語が学べるからと父の勧めで都立国際高校に進んだことで、オセロの白黒が入れ替わるような感覚に出会います。

帰国子女や在京外国人の友人たちが、生き生きと楽しそうに国際色豊かな経験を語り、海外経験のない日本の友人達の方が "純ジャパ”だから、と決まり悪そうにしていたのです。

日本人に溶け込みたい自分と中国人として誇りを持ちたい自分。揺れ動く気持ちをメタ認知する中で見えてきた日本社会をレポートやスピーチにしてみると、友人や先生方が面白がってくれ、自己肯定感も高まっていきました。

大学はSFC（慶應義塾大学、総合政策学部）に進学しましたが、AO入試で提出したエッセイは以下のような内容でした。

＊＊＊

幼い頃、祖父と父が営む中国雑貨店に、中国人男性が訪ねてきた。腹痛で苦しむ奥さんのために薬を分けてほしいと言う。

父は病院に行くよう勧めたが、保険が利かず高額になると言い、結局男性は薬を受け取り帰っていった。

この時、初めて外国人の権利保障問題に直面。それまで日本人ではないことで感じてきた疎外感や劣等感は他者理解や学びのきっかけに変えていけば良いと思っていたが、自分が乗り越えても問題自体はあり続け、自分と似た境遇の別の誰かがまた躓くのだと気づいた。

自分の問題意識を一番良い形で解決に近づける場として、政治、経済、文化など多方面からアプローチするSFCは自分に相応しいと確信し、志望する。

＊＊＊

保育の現場で子ども達一人ひとりの個性を積極的に肯定し、応援していくこと。また、保育士として、ジェンダー平等の他、貧困や虐待の発見、改善を促す役割を担えることに喜びや使命感を覚えるのは、マイノリティの当事者として社会問題に向き合ってきた経験に寄るところが大きいと感じています。

◆非地位財に着目して生きる

子ども達は日々やりたいことに全力で挑み、自分ができないことは周囲を巻き込んで実現していきます。

そんな子ども達に学び、土日の他、平日週1回は休み、近隣小学校で英語ボランティアをしたり、コミュニティFMに出演したりと、プチ・サバティカルタイムを楽しむことにしました。

誰もが等しく生きる価値があることを知り、それぞれにとって自分らしく幸せな生き方、働き方を見つけられますように。

子ども主体の保育を通じ、非認知能力を高める保育を実践することでVUCAの時代を生きる子ども達を応援しながら、自分自身も更なる可能性にチャレンジしていきたいと考えています。

＜参考：用語の説明＞

・ストレングスファインダー

アメリカのギャラップ社が開発した、人の「強みの元＝才能」を見つけ出すツール。現クリプトンストレングステスト

・VUCA の時代

Volatility（変動性）、Uncertainty（不確実性）、Complexity（複雑性）、Ambiguity（曖昧性）という 4 つのキーワードの頭文字を取った言葉で、変化が激しく、あらゆるものを取り巻く環境が複雑性を増し、想定外の事象が発生する将来予測が困難な状態を指します。

・サバティカル

使徒用途を問わない職務を離れた長期休暇。長期ではないのでプチをつけました。

・非地位財

お金や社会的地位など､他者との比較優位により価値が生じる『地位財』に対し、休暇や健康、愛情、心地よい環境など、他人との比較とは関係なく、それ自体に価値があり、喜びを得られるもの。地位財よりも幸福感が持続するとされています。

彩り豊かなパレットで描く私のキャリア

鈴木加奈子
日本語教師

これまで、放送、教育、就職支援とさまざまな仕事をしてきましたが、元々目的をもってそうしてきたわけではなく、人生の優先順位が変わる中で、できること、やりたいことを模索していたら、結果的にいくつかの仕事をするようになっていました。ひとつの仕事を極め人生を一色で描いてきた濃い人生の方と比べると、私の人生は淡い水彩画のような人生かもしれません。

◆キャリアのスタートは「アナウンサー」

テレビ全盛期に育った私はアナウンサーになりたいという一心で、大学の放送学科に進学しました。学生時代からラジオやテレビ番組のアシスタントとして取材をしたり情報を伝えたりする機会に恵まれ、就職活動は全国の放送局を受験しました。そして運よく、静岡の放送局にアナウンサーとして就職しました。放送の仕事は、好奇心旺盛な私には天職に思えるぐ

らい、大変やりがいのある仕事でした。しかし、就職した放送局では女性が契約社員だった上、「女子アナ」に求められるものに違和感もあり、キャリアを積んでもその先に何があるのか見えず退職することにしました。

そのような時、東京での仕事のチャンスもあったのですが、ちょうど、結婚も決まり、考えた末、夫の住む静岡でアナウンスの仕事を続けることにしました。ところが、当時、静岡ではアナウンサー職の中途採用はほとんどない上に、仕事の数や種類も少なかったのです。面接に行けば「結婚している方は…」と言われてしまいます。努力して就職しスキルも身につけたのに、それを活かす仕事ができないというのは本当にショックでした。夫と離れて暮らしキャリアを活かす道もあったのでしょうが、一緒に暮らしたいという想いが強く、私が「今、ここでできること」は何だろうかと悩む日々が続きました。

◆「日本語教師」との出会い

そんな時に出会ったのが日本語教師の仕事です。アナウンス同様、言葉に関係する仕事であったこと、元々海外に興味があったこと、そして、教師は女性が長く続けられる仕事なのではないかと考え、養成講座の受講から始めました。また、少しずつではありますが、テレビのリポーターやイベントの司会なども増え、それらの傍ら地元の大学院にも通い、日本語学校や大学で留学生に日本語を教えるようになりました。

その頃、留学生は学費を捻出したり家族に仕送りしたりするために、夜遅くまで複数のアルバイトをかけもちすることが当たり前でした。疲れ果て、眠い目をこすりながら、いつか日本と母国の架け橋に…と一生懸命勉強する姿に心打たれ、やりがいを感じると同時に、彼らのために教師としてもっと成長したいという想いが強くなりました。アナウンサーの仕事を続けたいという気持ちもありましたが、華やかさや若さを求められることに居心地の悪さを感じ、40 歳を前にキャリアの比重を日本語教師にシフトしていこうと決心しました。そのためには、外国人に対する語学教育についてさらに学ぶことや自分自身が異文化の中で学生の立場を経験してみることが必要ではないかと思いました。夫も後押ししてくれ、オーストラリアの大学院に単身留学し、その後は日本語教師の仕事をメインに、県内の大学の非常勤講師として留学生の日本語指導に携わりました。

◆新たな挑戦は「留学生の就職支援」

50 歳を過ぎ、長く大学で留学生の日本語指導をしてきたご縁から、特任教員として留学生の就職支援に携わることになりました。当初は、就職支

援という全く経験のない分野でどこまでのサポートができるか不安でしたが、日本で就職したいのに夢が叶わず帰国していく留学生を数多く見てきた経験から、そのような留学生の役に立てるならと挑戦することにしました。

ところが、実際に仕事を始めてみると想像とは異なり、日本や彼らの母国の経済状況、留学生の考え方も大きく変わっていました。日本での就職に魅力を感じない学生、「自分探し」に悩む学生、「働く」ことに自信が持てない学生もおり、支援するといっても容易なことではありませんでした。また、留学生は、大学院進学にしても就職にしても、常に母国、日本、場合によっては第三国という選択肢、加えて、母国の状況や家族の意向もあり、進路を決めるには時間もエネルギーもかかります。日本で就職したくても、日本語でのコミュニケーションに自信が持てなかったり、日本の企業文化に身を置くことに不安を感じたりして、日本で自分にどんな仕事ができるのか想像できず、就職に躊躇してしまうこともあります。留学生自身が自分の進路を決めきれていないうちに、書類の書き方や企業分析のし方など就職活動に直結するような支援をいくらやっても表面的なものにしかなりません。こちらが無理やり就職させようとしている気さえして、本当の就職支援とは何か考えさせられました。留学生が自らの価値に気づき、成長し、自己実現できるように、キャリア形成の支援をすることが大変重要であると感じました。

4 年半の任期が終わり、現在は非常勤講師にもどり日本語を教えていますが、就職支援の仕事や自分自身のキャリアで悩んできた経験から、改めて、働くこととは何か考えたいという想いもあり、現在は、新たに産業カウンセラーの勉強を始めました。留学生が将来の進路に迷った時、就職した元留学生が悩みを抱えた時に、自分の経験を役立てながら本当の意味での支援ができたらと思っています。

◆人生後半は彩り豊かなパレットで

振り返ってみると、私の場合、「何になりたいか（職業）」は問い続けてきましたが、「何をしたいか」という視点には欠けていたように思います。人生の各ステージでは、決して努力や熱意だけではどうにもならない制約や優先順位の変化があり、「何になりたいか」だけでは限界を感じて苦しくなりますが、「何がしたいのか」という視点があれば、職業や働き方を変化させて、その時々を自分らしく生きることができるのではないでしょうか。

私の転職は決して積極的なものではなく、ライフステージが変わる中で、バランスも変わり、その時々に「今、ここでできること」をやってきたら

「転職」のような形になっていました。実は、数は少ないながらも、今でもアナウンスの仕事を頼まれることがあります。あくまでも比重を変えただけで辞めたとは思っていないので、万が一「女子アナ」より「シニア・アナウンサー」のニーズが高まるというようなことになり、その時にやってみたいと思えば、そちらがまたメインになるかもしれません。

転職というと完全に仕事を変えることのように思いますが、私の場合はグラデーションのようなイメージです。人生のある時期は濃い色で、ある時期は淡い色。時期が変われば、また色が濃くなるかもしれない。さらに、新しい経験やチャレンジ、人との出会いでパレットに新たな色が増え、混ぜれば新しい色がいくつも生まれる。それは自分だけの唯一無二の色だと思うのです。

人生100年時代と言われますが、人生の後半は、彩り豊かなパレットで、その時その時の自分の想いを大切にしながら、「今、ここでできること」「やりたいこと」に挑戦し、自分のキャリアを、人生を、私だけにしか出せない色の絵の具で描いていきたいと思います。アナウンサー×日本語教師×就職支援の先に何が待っているのか、私自身も楽しみにしています。

知行合一であることが、自分のウェルビーイング

寺西隆行
ライフイズテック株式会社　官民共創プロモーター
文部科学省　広報戦略アドバイザー
経済産業省　「未来の教室」教育・広報アドバイザー

2022年4月に転職しました。その1日前のFacebookに、相当考え、そして多くの方に役立つようにと願い投稿した記事をご紹介することが、今回の記事に最も相応しいと思いましたので、大変恐縮ですが、ご覧いただければと思います。

＊＊＊（以下、投稿。絵文字等を除き原文ママ）＊＊＊
◆籍を移します
本日2022年3月31日をもちまして、25年間お世話になったZ会グループから離れます。
明日2022年4月1日から、ライフイズテック株式会社に新たにお世話

になります。

・・・

2016 年に一般社団法人 ICT CONNECT 21 へ出向となってから約 6 年間（今年度 1 年は Z 会グループに籍を戻していました)、国の教育政策、なかでも ICT 関係の政策支援の業務を続けてまいりました。

2022 年度以降、よりご支援できる自分の環境を考えたときに、この選択となりました。よって、引き続き、文科省や経産省等の教育政策にも関わる見込みですが、具体的なことはほとんど決まっておりませんので、本日の段階ではご報告できません。ほんとに決まっていないので。

形上は転職となるのですが、自分の中では職を変えるというイメージが全く湧いておりません。少なくともこの約 6 年間やってきた業務領域（≒社会における PPP 領域の構築と拡大）と余り変わらないと想定しています。籍が移るだけ、というイメージがしっくりくるのでこの冒頭表現にしました。

Z 会グループでの名刺は、この約 6 年間、作っていません。そういう業務、つまりは、Z 会の商品・サービスとはほぼ無関係の業務に従事してきたとお考えいただければ幸いです。

・・・

自分視点で職を含めた生き方を考えるときに大事にしているのは次の 2 点です。

●「can、must、will の重なる領域の最大化」

●最も強い will は、「自分（家族含む）と周り（会社含む）と社会のそれぞれの幸せが重なる領域の最大化」

これを突き詰めたときに、いまの自分とマッチすると考えるところの最上位の選択をしたことになります。

好き嫌いや得意不得意だけ申せば、Z 会グループの皆さんは大好きですし、25 年間とても良い環境で働けたなと思っていますし、これからより必要性が強くなる ICT を使いこなすのはいまだに苦手意識があります。

ただそのことと、自分の職業選択において考えることとの重なりはあまり大きくなく、上記にあげた 2 点において、人生 100 年時代ということを考えつつ、一番マッチすると捉えた選択をさせていただきました。

・・・

不遜ながら、近現代の教育の歴史から見た現在地点を自分の視点で見つめたとき、2022 年は学制公布から 150 年にあたる節目の年であり、その半分にあたる 75 年前は学校教育法が公布・施行された年にあたります。学校教育法の公布・施行の直前が、太平洋戦争の時期です。

そういう目でいまの子供たちを取り巻く状況に教育を重ねて考えると、根本的に変えていかなければいけないところがあると感じています。蛇足的に申すなら、改革という行為・手段が考え方の先にあるのではなく、たとえば、国数社理英という 5 教科の枠組みって best だっけ、とか、小学校 6 年間中学校 3 年間って best だっけ、とか、多くの方が常識と捉えていることをいったんカッコで括って考え、未来を見据えた最適な手を打つことを本気で考え実行する時期では、と思っている次第です。

その思いに基づき、自分の最適な身の置き方、他者への貢献の仕方として、籍を移す、という選択をさせていただきました。

・・・

人間ですから、そのような思いや考えにいたるまで、私自身、毎日、ずっと少しずつ変化しています。人から見るとその変化の良し悪しはあるでしょうが、私はそのことを成長だと捉えています。そしてその成長を作ってくれた最も大きな要因の 1 つに、25 年間お世話になった Z 会グループでの業務環境があるのはもちろんのことです。換言すれば、Z 会がなければいまの私はありません。心ではこれからもずっとそう思い続けることは間違いありません。

「形を変えて、これからも、どうぞよろしくお願いいたします。」社内で最後に頂戴したメールです。新入社員の時から私をよく知り、いま一番業務に近い方からでした。

うん、ほんと、そんな感じ。私という人間の理解者に囲まれた 25 年間でした。

・・・

写真は娘の通う小学校の桜です。いまほんとに見頃です。

社会で生きる多くの方に、少しでも多くの「幸せ、という思い」が宿ることをこれからも祈念して、教育領域で自分の役割を果たし続けたいと思います。

今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

2022 年 3 月 31 日　寺西隆行

＊＊＊（以上、投稿）＊＊＊

自分は、教育が大好きな人間です。教育を通じて、周りと社会が幸せな状態を作り上げることが、私自身の幸せに跳ね返ります。そんな自分になれるよう、自分の can（できること）を磨き続けたい、そう思っています。

職は must にも影響されます。長期的には少子高齢化に拍車がかかる社会ですし、VUCA の時代とも言われています。そしてパンデミックも起きました。そのようなときに、「教育を通じて、自分も周りと社会が幸せになる」must は何か、と考えたときに、白紙から何かを想像する、そして創造する、という経験が、現在の公教育のシーンではかなり少なく、かつ、その経験を作る当事者も少ない、と、以前から感じていた思いが強くなり、自分が当事者になるために転職した、となります。

本稿を書いているのは転職して約半年後の自分です。お陰様で、自分が当事者となって、「創造する」若い人が世の中にどんどん出てくるような政策立案等に、パブリックアフェアーズを通じて、大きく関わることができているという実感があります。

ウェルビーイングであることは誰しも望むことだと思います。当然、職を通じても、その状態を達成できることが理想だと思います。いま、私は、とてもウェルビーイングなのですが、それは、知行合一である自分でありたい、という気持ちを最優先し、転職という選択ができたからだと思います。

上記投稿文にもある通り、学び続ける限り成長していきます。成長した自分から見ると、過去の自分の様々な考えと異なる場合も当然出てくると思います。そのときに知行合一を意識してほしいのです。「今の自分の考え方と行動は合っているか？」と。その結果としての転職であれば、きっとウェルビーイングであれると思いますし、そのことはまた、転職という決断をできる自分まで成長させてくれた、それまでの周りの環境に深い感謝の気持ちを感じると思います。

この記事が皆様の幸せにつながることを願っています。

変えるもの、変えないもの
～転職経験と、転職支援経験から思うこと～

長谷川由加子

転職アドバイザー

転職を考えるきっかけは何でしょうか。

年収アップ、労働時間の削減、将来への不安、人間関係の改善、仕事のマンネリ…

前職・現職で転職支援をしていると様々な転職理由を伺いますが、全てに共通しているのは、「何かを変えたい」という思いです。私自身も過去に3回の転職をしていますが、いずれも変化を求めていました。

しかし転職には、「失敗」するケースも一定数存在します。転職に失敗したと感じる主な理由は、次の2つがあるようです。

1）思ったほど前職と変わらなかった

2）変えたい点だけでなく、良かった点まで変わってしまった

転職は、待遇・働き方など全てを変えます。業界や職務の特性により変わらない点もありますが、実績や信頼関係を作り直し、社風や業務フロー、勤務地の変化による生活時間の変化にも慣れなくてはいけません。特に初めての転職をした方は、想定以上に多い変化に戸惑います。だからこそ、転職の際には「変えるべきもの」だけでなく、「変えてはいけないもの」も認識しておく必要があります。

転職に失敗しないために、私は 2 つのことが重要だと考えています。1つは「転職目的」の明確化、もう1つは、「長期的なキャリアイメージ」を持つことです。後述の通り、両者は密接に関係しています。

１）転職目的を明確にする

転職目的の明確化は、「変えるべきもの」を明確にし、「変える方法として転職が適切なのか」を問う作業です。なぜ変えたいか、どう変えたいか、は、現状の不満だけでなく、後述の「長期的なキャリアイメージ」からも考えます。

そもそも、働き方が多様化した今、現状を変える方法は転職以外にもあります。例えば、「収入を向上」させたいなら、副業や不労所得の確保でも可能です。実際、転職により年収が上がる人は全体の4割程度で（令和3年　厚生労働省雇用動向実態調査）、転職は年収アップを保証していません。同様に、人間関係や業務内容、働き方などを変える場合も、現職での異動や副業など、転職以外の方法も検討する必要があります。

また転職検討時は、大抵、複数の不満が存在しています。全ての不満を一気に解消するのか、順次解消するのか、優先順位や方法、時期などを冷静に検討する必要があります。その結果、転職が有効だと判断すれば、その根拠が転職目的となります。内定をいただいた際は、内定先企業で転職目的が果たせるのかを今一度よく検討し、目的を達成できないと感じるなら、内定を辞退する勇気を持った方が良いのです。

２）長期的なキャリアイメージを持つ

激動の時代で育った若年層は、ライフイベントの有無も含め、将来のことは分からないと感じる方も多いでしょう。また初めて転職する中高年層では、「私なんかを雇ってくれるならどこでも」と話す方が多くおられます。

しかし、「今」だけを見た転職は良い結果を生みません。私の初めての転職がまさにそうです。私は学生の頃から“人の人生を少し良くする手伝いをしたい”と考えており、新卒で派遣会社に就職しました。しかし就職先は残業が多く体力面での限界を感じたため、残業の少ない事務職に転職しました。最初は残業が減って心身の余力ができ、生活に満足していましたが、次第に“やはり対人支援職に戻りたい”という思いが強くなり、転職支援をするため、現在の人材紹介業に入りました。目先の不満（残業過多）を解消することに捉われ、自分の価値観（人の人生に関わる）を蔑ろにしたため、新たな不満が生じてしまったのです。

長い人生の中で、仕事の位置づけや目標が変わることはあります。しかし、より根本的な「自分のありたい姿」や「取り組みたいこと」は大きくは変わりません。これらの価値観は、自身の人生や職業観と向き合い、周囲と対話をすることで確立していきます。自分の価値観を理解すると、将来の理想像も見えてきます。それは、生活のあり方や仕事を通じて実現したいこと、公私の人間関係のあり方など多岐に亘るでしょう。特に重要な要素について解像度を上げると、「変えてはいけないもの」と、理想像に向けて「何を、どう変えるべきか」が浮かび上がり、「転職目的」も明確になります。

◆まとめ

以上、転職に失敗しないための考え方を自分なりに整理してみました。個人情報保護の観点から私自身を例にしていますが、転職支援をしていても同様の例は散見されます。

転職活動は、自分自身と向き合い、自分の価値観に沿った働き方を見つける作業です。そのために「何を変えるのか、変えないのか」を考えます。

どちらも個人の価値観に根ざしており、万人にとっての正解となる転職先は存在しません。

転職を含め主体的に自らキャリアを作るためには、転職の有無に関わらず、定期的に自分自身のこれまでを振り返り、将来を考える時間を作ることが必要です。自分がどのように働けば心地良い人生になるのかを知り、その心地良い状況を作る。転職はその一手段でしかないのです。

自分の生き方を肯定するための考え方

川合智之
たのしい働き方・学び方研究所　代表
静岡キャリア形成支援協同組合　理事

私は、３度の転職を経て 2021 年より、たのしい働き方・学び方研究所の代表として地元、浜松市を中心にキャリア教育、研修、相談、コンサルタント業などに携わっています。具体的には、大学の非常勤講師、高校の探求学習プログラムの支援、キャリアコンサルタント養成講座の講師、企業のセルフィキャリアドックや研修、職業訓練の講師など幅広く活動しています。最近では就職氷河期世代に対するサポートにも携わらせていただくようになりました。

かく言う私も就職氷河期世代であり、友人の多くは新卒で採用された企業や団体、学校で今も働いています。彼ら、彼女らから見ると、私の働き方、生き方は突飛なもののように感じるようです。（社会全体から見ると、それほど珍しいものではないのですが・・・）

また、このような考え方は私たち世代に限ったことではないようです。高校生や大学生の授業や面談の中でも、「安定した企業で働きたい」、「転職せずに一つの会社で長く働きたい」といった声をよく耳にします。

ただ、私も最初からこのような働き方を考えていたわけではありません。むしろ、一度就職したら、その会社で定年まで働きたいと思っていた一人です。

◆“なんとなく”進学から始まった安定志向

私は、実家が小さな農家であったため、大学は“なんとなく”農学部に進学しました。当時の私は、親や教員から言われたとおり、「卒業後は大学で

学んだことを生かすことが当たり前」、「なるべく公務員のような安定した仕事に就きたい」と考えていたため、“なんとなく”地元の農業関係の団体に就職しました。そこでは、新規就農者の支援や青年部の運営などの企画の仕事、野菜の集出荷などを経験したのですが、何か違うと思い 4 年半で退職してしまいました。今思えば、双子の子どもが生まれたばかりで妻もよく許してくれたと思います。

転職活動を行うことになるのですが、基準は当時も「安定」がキーワード。その時、たまたま新聞に掲載されていた求人情報を見て、「医療系であれば安定している！！」と考え、“なんとなく”医療系の法人に転職しました。転職して最初の配属は、外来の受付係で、私以外は全員女性の職場で、患者様の受付やカルテのメッセンジャー、診療報酬の計算などからスタートしました。当時は、小さなプライドが邪魔をして、この転職は失敗だったと思うことも多々ありました。その後、異動や昇進があり、人事、職員研修、総務、営業、経営管理など幅広く経験させていただきました。ここでは約 11 年、在籍しておりましたが、当然定年まで働くものであると考えていました。

◆“なんとなく”からの脱却した働き方のスタート

では、3 社目の転職をなぜ行ったのか。当時、職員研修を担当した際に、「あなたは講師の仕事が向いていますよ」と上司から言われたことがありました。この一言をきっかけに、キャリアコンサルタント資格を取得しました。そして、ここで得たことやこれまでの経験を生かした仕事に就きたいと思うようになり、人材育成の仕事に興味を持ち始めました。これまで、“なんとなく”の繰り返しで進学、就職を決めてきましたが、“なんとなく”から脱却できたのがこの時であったと思います。

丁度その頃、文部科学省がインターンシップの推進や地方創生に力を入れるようになり、地元の大学でも事業として取り組むことになりました。求人もあったため、渡りに船と思い、思い切って転職しました。思えば、この時の転職が、今の私の働き方のスタートではないかと思います。
3 社目となる大学での仕事がスタートしたわけですが、大学を卒業して約 20 年経っており、当初は、大学で働くことや仕事の進め方がまったくイメージできない状況で、教員と職員との関係性や、事業の進め方など企業とは違った文化があり戸惑うことばかりでした。

ここでの私の仕事は、インターンシップを起点に大学、企業、行政と連携することで地元の人材定着や育成を目指すもので、コーデネーター的な役割を担っていました。そこで、40 歳を過ぎていましたが、改めて大学教

育やキャリア教育について大学院で学び直すことを決意し、修士号の取得にも取り組みました。大学での仕事は任期付き職員として５年、教員として１年半携わりました。

◆働き方の礎となるキャリアの資産

そして、現在に至るわけですが、“なんとなく”進学、転職した経験が予期せぬ形で今の私の働き方の礎になっていることに気づきます。例えば、新卒時代の企画の仕事や２社目で経験した人事や営業、マネジメントの経験は、大学でのコーデネーターの仕事の基盤となり、さらに現在のコンサルタント業でも役立っています。また、農学部で学んだ経験や医療系法人で働いた経験から、福祉系大学や農学部でのキャリア教育の非常勤講師にもお声掛けいただいています。

他にも挙げていけば、きりがないのですが、思い返してみると、“なんとなく”決断し、取り組んできたことであっても、そこでの経験は無駄ではなく、自分の資産として蓄えられているのではないかと思います。この資産を増やしていくには、過去の経験を振り返り、言語化し、意味づけしていくことが大切であると考えます。

私は、高校生や大学生から進学や就職について相談を受ける機会がありますが、「自分は何もできない」、「何をしたいかわからない」といった発言をよく耳にします。その際に、安易に励ますのではなく、これまでの経験を一緒に振り返り、言語化していくことで、「自分のできることは確実に増えている」ことに気付き、「今、何をしたいかわからなくても、これまでの経験がその先のキャリアプランを考えるヒントになる」と捉える生徒、学生も見受けられます。

生きている中で、自分を肯定できないことは少なからず経験すると思います。そんな時こそ、これまでの自分の生き方、働き方を振り返り、“私”自身の過去をストーリーとして紡いでいくことで、自分の生き方、働き方から意味を見いだすことができるのではないでしょうか。

自分が今までの人生で蓄えてきた内面的なキャリアの資産をたくさん見つけることができると思います。

■――

【書評】『教師の社会学―フランスにみる教職の現在とジェンダー』

――

『教師の社会学―フランスにみる教職の現在とジェンダー』

（園山大祐監修・監訳、田川千尋監訳、京免徹雄・小畑理香編著

勁草書房　2022）
https://www.keisoshobo.co.jp/book/b610916.html

高丸理香（お茶の水女子大学）

女性が長く働くことができる職業をイメージするときに真っ先に思いつくのが教師ではないだろうか。最初に身近に働く女性として認識する存在が教師であるためかもしれない。本書は、そのような誰もが接したことのある教師という職業が抱える、①教師の質保証（教師の専門職化）、②教師の社会的評価（教師不足と教師を支える環境整備）の課題について深く考えることを意図している。そのために、「ジェンダー」と「社会学」の切り口からその根元を見定めようとしたものだが、そこに“フランス”の教師教育研究を参照するといった特徴的な学術書である。

本書は序章と終章をあわせると全 20 章もある力作だが、3 つのトピックス（第 1 部：教師の変遷と現在、第 2 部：教師とジェンダー、第 3 部：教師の労働環境）にそれぞれ 6 つのフランスの研究論文がバランスよく収められており、まったく読み飽きることがない好著である。ここでは、3 つのトピックスから個人的に着目した部分(章)について簡単に紹介したい。

まず第 1 部の「教師の変遷と現在」だが、第 3 章「教職の変遷－どのような職業アイデンティティーなのか？－（ピエール・ペリエ／田川千尋訳)」の冒頭にて、「フランスでは教職は非常に多様化（p.61)」していて「職業アイデンティティーは、より不確か（p.61)」になっていると述べられている点に驚きを覚えた。日本の「学校の先生」とは、大学で教員免許状を取得したのちそのまま教職に就くイメージがある。しかし、フランスでは、日本と同じような“教職への道”とは別に「学生以外からの候補者採用（p.64)」、すなわち教職以外の職業を経て教職となる割合が 2015 年時点で 4 割近くなってきているという。このことが職業的遺産の伝達や職業アイデンティティー構築、職業の専門職化に影響をもたらしていることについて、筆者は「喪失」や「危機」ではなく、「変化」であり「進化」していくものと結んでいる点に共感を持った。

第 2 部の「教師とジェンダー」は個人的な関心もあり最も興味深く読み進めたのだが、そのなかでも第 10 章「教師の実践はどのようにして性別間不平等を作り出すか？（ニコル・モスコニ／田川千尋　訳)」の「誰をも同様に扱う、という学級内を支配していると考えられる非常に厳格な公平性の規準には、実際には男子を優先的に扱うという暗黙の規準が隠されているのである（p.225)」という指摘に、フランスでも日本と同じような状

況にとどまっていることに衝撃を受けた。生徒も教師も「性別間の平等の実現」を真剣に信じているのに、「性別と教科とを分け、ヒエラルキー化する「暗黙の社会的認知」の中に囚われている（p.234)」ジレンマから脱却するために、日本で教育にかかわる我々も、自分事として考え、取り組み始める必要がある。

第 3 部「教師の労働環境」のトピックスで扱われている学校の「外」の労働や教師の離職といった問題は、日本でも課題として認識されつつある。そのようななか、教師を支える多様なスタッフについては見落とされがちである。第 18 章「教師を支える多様な専門職の役割とアイデンティティー（京免徹雄)」では、年々増加している多様な学校業務を支える支援スタッフにスポットを当てている。第 3 章で教職の職業アイデンティティーの多様化が指摘されていたが、それでもまだ「教科指導という確固たるアイデンティティーが教師に見出せるのに対して、支援スタッフの専門性（p.368)」はさらに難しい状況にあるという。心理相談、社会生活支援、資料・情報教育指導などに携わる多様な専門家が配置されてこそ学校の本質的な目的が達成されることは疑いようがない。日本の大学でも学部における高等教育・専門教育を充実させるために、多様な専門家がさまざまな位置づけで配置されていることからも想像できる。京免氏が提案するように、多様な教師や支援スタッフが各々の専門性を活かせるように「それぞれの職務の境界線をより明確化した上で、連携・協働の枠組みを共同構築する（p.378)」ことは、「学校の先生」を取り巻く世界に根強く残る課題を是正していくための重要な嚆矢となるだろう。

本書は他にも多角的な視点からの示唆に富む提言が収められている。おそらく本学会員にとっては、まったく関係のない話題ではないはずであり、ぜひ手にとっていただきたいお得な一冊である。

■――

【お知らせ】　日本キャリア教育学会 第 44 回研究大会

――

第 44 回研究大会のお知らせ

日 時：2021 年 11 月 12 日（土)、13 日（日）
場 所：オンライン開催
テーマ：キャリア教育と心理的安全性
共催：公立大学法人　秋田県立大学
後援：秋田県教育委員会

ウェブサイト：https://jssceakita2022.org/
大会プログラム：https://jssceakita2022.org/Taikaiprogram

※2022 年度の定期総会はオンライン開催となります。
ミーティング参加にかかる情報については、大会実行委員会からの郵送物をご確認ください。

-+-

◇日本キャリア教育学会ニューズレターは、日本キャリア教育学会情報委員会が発行し、特集テーマに沿った記事を会員の皆様にお届けするものです。
◇会員の皆様のメールアドレス確認・登録を継続的にしております。まわりの会員でニューズレターが届いていない方がおられた場合、学会事務局（jssce-post@bunken.co.jp）宛に受信用メールアドレスから登録申請していただきますよう、お伝えください。
◇ニューズレターに対する皆様のご感想・ご意見・ご提案を随時お待ちしております。情報委員会（jssce-ic@googlegroups.com）までお気軽にご連絡ください。
◇キャリア教育関連の著作を発刊・発表した会員は、是非とも学会事務局まで献本いただければ幸いです。学会ウェブサイトに書名と著者名を掲載した上で、書評欄で取り上げさせていただきます。
◇文中敬称略

日本キャリア教育学会情報委員会　発行
委員長：家島明彦　副委員長：渡部昌平
委員：京免徹雄、長尾博暢、市村美帆
高丸理香、竹内一真、橋本賢二
本田周二

-+-